

三重・名張市内伝来の安本亀八制作の肖像彫刻について

塩澤寛樹

三重・名張市内伝来の安本亀八制作の肖像彫刻について

塩 澤 寛 樹

はじめに

安本亀八は、文政九年（一八二六）に熊本迎町（現熊本市中央区迎町）の仏師春蔵（あるいは善蔵）の家に生まれたといい、その後、大阪に出て生人形興行で好評を博し、次いで東京へ上つて生人形、菊人形等の興行を行い、明治三十三年（一九〇〇）十二月八日に七十五才で没したと伝えられる（『讀賣新聞』及び『東京朝日新聞』十二月九日）。

亀八の生人形興行は大きな評判を呼び、松本喜三郎と共に、その名手として明治期には広くその名を知られていた。しかし、亀八の事績や遺作を辿れば、彼が「生人形細工人」としてのみ生きてわけではなく、仏師としての作例をはじめ、肖像、置物、絵馬（レリーフ）、能面、風俗人形、絵画など幅広い領域で制作活動を行ったことが分かる。

幕末期に亀八が一時滞在したと伝えられる三重県名張市内には、亀八による肖像彫刻がまとまって伝存し、これらは一般に生人形と呼ばれることもあるが、後述のように亀八の仏師としての事績の範疇に該当すると思われる。筆者は二〇二〇年三月、肖像七軀を精査する機会に恵まれた。諸像はこれまで未紹介ではないものの（参考文献の富森一九七六、熊本市現代美術館二〇〇四、瀧川二〇〇八など）、概要等が詳しく紹介がされたことはなかった。

そこで本稿では、彫刻史の観点から諸像の概要を紹介すると共に、

併せて若干の考察を加え、肖像彫刻としての意義を探ると共に、亀八の多様な事績を総合的に捉えるための一助としたい。

なお、亀八については、名張在住であった富森盛一氏による『生人形師 安本亀八』（一九七六年十一月 名張青年会議所）が先駆的かつ詳細な研究として知られ、本稿もこの恩恵にあずかるところが大きいことを申し述べる。

一、各像の概要

各像の概要は詳しく紹介されることがないので、ここで一軀ずつ示すこととする。

角田半兵衛坐像

（一）形状

頭頂のやや後ろよりで鬚（亡失）を結う。頭髮は白髪交じりとす。鼻孔、耳孔は内割り内に貫通する。両手は膝上に置き、左手は軽く握り、甲を上にして扇の基部を執り、右手は甲を上指を伸ばして扇の先に添える。顔を正面に向けて、膝を軽く開き、正座する。服制は、茶色の小袖の上に黒の紋付き羽織を着け、青地に縞の袴を着ける。左腰に刀を差す。

(一) 品質・構造

木造(桐材か)。寄木造。彩色。玉眼嵌入。

頭部は面部で前後に割り矧ぎ、内割りを施し、玉眼を嵌入する。筒状の首柄を造り(内割りを施す)、体部に挿し込む。体幹部は後ろ寄りに前後に割り矧いで、内割りを施す。脚部は前後に三材を矧ぐ。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。像底に底板を嵌め込み、白色に彩色する。袖先の地付き周りは別材を矧ぐ。羽織の紐は紺の組紐を用い、刀は木製とし、扇は実物を用いる。

(二) 保存状態

頭頂の鬘を亡失する他は、彩色の一部に小さな剥落がみられる程度で、概ね良好である。

(四) 法量(単位:センチメートル)

像 高 三四・八

頭頂く顎先 一一・八(現状) 面 巾 七・九

耳 張 九・一 面 奥 一〇・二

肘 張 二三・二 袖 張 三六・二

胸 厚 一一・七 腹 厚 一三・〇

膝 奥 三〇・〇 坐 奥 三二・〇

膝高(左) 五・六 膝高(右) 五・五

(五) 銘記・納入品

認められない。

(六) 制作年代

江戸時代末期(一八六〇年代)

(七) 伝来

角田氏屋敷内に角田みか坐像と並置される。

(八) 備考

角田家には、亀八の筆とされ、本像下絵と伝わる半兵衛の画像が伝存し、裏に「富教絵図」と墨書される。角田家当主は代々半兵衛を襲名するが、富教は幕末から明治にかけての当主という。

角田みか坐像

(一) 形状

後頭部で鬘を結び、笄を挿す。笄は頭頂部でも用いる。鼻孔、耳孔は内割りに貫通する。両手は膝上に置き、力を抜いて仰ぐ。顔を正面に向けて、正座する。服制は、薄い水色の襦袢(雷文をあしらう)に焦げ茶色の小袖(裏は灰色地に青竹文)、薄紺の紋付き(三羽鶴)羽織を着ける。

(二) 品質・構造

木造。寄木造。彩色。玉眼嵌入。

頭部は面部で前後に矧ぐまたは割り矧ぎ、内割りのうえ玉眼を嵌入する。首柄を設けて体部に挿し込む。体幹部の木寄せ詳細は明らかでないが、前後矧ぎ(または割り矧ぎ)とみられ、内割りを施す。脚部、裾部を矧ぐ。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。像底に底板は貼らず、紙貼りまたは布貼りの上、白色に彩色する。

(三) 保存状態

面部右側に彩色の割れが認められるが、概ね良好である。

(四) 法量(単位:センチメートル)

像 高 二九・三

頭頂く顎先 一一・一 面 巾 七・四

耳 張 九・四 面 奥 一一・三

肘 張 一八・九 袖 張 三四・六

胸 厚 一三・七 腹 厚 一四・六

膝 奥 二三・六 坐 奥 三〇・七

膝高(左) 五・七 膝高(右) 五・五

(五) 銘記・納入品

認められない。

(六) 制作年代

江戸時代末期(一八六〇年代)

(七) 伝来

角田氏屋敷内に角田半兵衛坐像と並置される。

角田富之坐像

(一) 形状

後頭部で鬘を結う。頭髮は白髪交じりとする。鼻孔を穿つ。両手は膝上に置き、左手は軽く握り、甲を上にして扇の基部を執り、右手は甲を上指を伸ばす。顔を正面に向けて、膝を軽く開き、正座する。服制は、青色の小袖の上に灰色の紋付き羽織を着け、青地に縞の袴を着ける。

(二) 品質・構造

木造。一木造。紙貼り・胡粉下地彩色。

頭部は一材より彫出し、体部に挿し込むとみられる。内割りには施さない。彫眼とする。体幹部も一材より彫出し、像底から内割りを施す。脚部は別材を矧ぎ、両側に袖材を矧ぐ。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。袖先の地付き周りは別材を矧ぐ。羽織の紐は紺の組紐を用いる。

(三) 保存状態

体部と脚部の矧ぎ目が離れ、彩色の下地に浮きが認められる。また、頭部右側、左・右肩、脚部などに彩色の剥落がみられる。

(四) 法量(単位：センチメートル)

像	高	一四・〇		
頭頂〜顎先	張	五・五	面	巾
耳	張	四・五	面	奥
肘	張	一〇・〇	袖	張
胸	厚	五・五	腹	厚
膝	奥	一二・四	坐	奥
膝高(左)		二・五	膝高(右)	
				二・七

(五) 銘記・納入品

認められない。

(六) 制作年代

江戸時代末期(一八六〇年代)

(七) 伝来

角田氏屋敷内に安置される。もとは、中庭の小祠内に安置されていたという。

岡村甚六坐像

(一) 形状

後頭部で鬘を結う。頭髮は黒く線描する。わずかに口を開け、下歯をみせる。鼻孔を穿ち、耳孔は穿たない。両手は膝上に置き、甲を上指を伸ばす。顔を正面に向けて、膝を軽く開き、正座する。服制は、茶色地に細かい格子柄の小袖の上に青の紋付き羽織を着ける。

(二) 品質・構造

木造。寄木造。彩色。玉眼嵌入。

彩色により頭部、体部の構造の詳細は不明だが、頭部は面部で前後に割り矧ぎ、内割りを施し、玉眼を嵌入し、首柄を設けて体部に挿し込むとみられる。体幹部にも内割りを施す。脚部は別材を矧ぐ。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。像底に底板を貼るまたは嵌め込み、白色に彩色する。鬘は別材。羽織の紐は紺の組紐を用いる。

(三) 保存状態

わずかな彩色の剥落があるが、概ね良好である。

(四) 法量(単位：センチメートル)

像	高	二四・八		
頭頂〜顎先	張	九・六	面	巾
耳	張	八・二	面	奥
肘	張	一八・三	袖	張
胸	厚	一一・四	腹	厚
				一一・五

膝 奥 一九・五 坐 奥 二一・六

膝高(左) 五・〇 膝高(右) 五・八

(五) 銘記・納入品
認められない。

(六) 制作年代

江戸時代末期(一八六〇年代)

(七) 伝来

市内個人の所蔵。

横山文圭坐像

(一) 形状

頭部は円頂とする。鼻孔、耳孔を穿ち、内割り内に貫通する。両手は膝上に置いて仰ぐ。顔をわずかに左に向けて、膝を軽く開き、正座する。服制は、青色の小袖に白い帯を締め、黒の紋付き羽織を着ける。左脇に刀を差す。

(二) 品質・構造

木造。寄木造。彩色。玉眼嵌入。

頭部の木寄せは明らかでないが、面部で前後に割り矧ぎ、内割りを施して、玉眼を嵌入するとみられ、首柄を設けて襟元で体部に挿し込む。体幹部も木寄せ不明だが、前後に割り矧ぐかとみられ、内割りを施す。両側面に肩から地付きに至る体側材を矧ぎ、脚部も別材を矧ぐ。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。像底に底板を嵌め込み、白色に彩色する。羽織の紐は薄茶の組紐を用いる。

(三) 保存状態

彩色表面に若干の汚れがある他は、良好である。

(四) 法量(単位:センチメートル)

像 高 二五・〇

頭頂ノ顎先 九・一 面 巾 六・三

耳 張 八・二 面 奥 八・五

肘 張 一七・七 袖 張 二一・五

胸 厚 一〇・五 腹 厚 一一・三

膝 奥 一九・三 坐 奥 二二・五

膝高(左) 五・八 膝高(右) 五・六

(五) 銘記・納入品
認められない。

(六) 制作年代

江戸時代末期(一八六〇年代)

(七) 伝来

市内個人の所蔵。

(八) 備考

龜八は、像主宅の裏長屋に寄寓していたとされ、その間の様々な伝承も伝えられる。

小野三左衛門坐像

(一) 形状

後頭部で鬘(亡失)を結う。頭髪は墨彩する。鼻孔をくぼめ、耳孔は穿たない。両手は膝上に置き、右手は軽く握り、甲を上にして扇の基部を執り、左手は仰ぐ。顔を正面に向けて、膝を軽く開き、正座する。服制は、青色の紋付き小袖の上に灰色の肩衣(裏地は緑)を着け、黒地に縞の半袴を着ける、いわゆる半袴の姿である。白い帯を締める。左腰に刀(亡失)を差す。

(二) 品質・構造

木造。寄木造。彩色。玉眼嵌入。

頭部の木寄せは明らかでないが、面部で前後に割り矧ぎ、内割りを施して、玉眼を嵌入するとみられ、首柄を設けて襟元で体部に挿し込む。体幹部も木寄せ不明だが、左右に矧ぐかとみられ、内割りを施す。両側面に肩から地付きに至る体側材を矧ぐか。脚部は前後に三材を矧ぐ。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。像底に底板を嵌め

込み、白色に彩色する。

(三) 保存状態

刀を亡失し、彩色表面に若干の汚れがあるが、概ね良好である。台座は亡失したと思われる。

(四) 法量(単位：センチメートル)

像	高	二二・〇	面	巾	五・七	
頭頂く顎先	張	八・六	面	奥	八・〇	
耳	張	七・二	袖	張	二二・二	
肘	張	一七・四	腹	厚	八・七	
胸	厚	八・九	膝	奥	一八・六	
膝	張	一五・八	膝高(左)	四・〇	膝高(右)	四・〇
坐	奥	一九・八				
厨子	高	四六・三				

(五) 銘記・納入品

文久三癸亥年

義讓院殿寿山楽翁居士

行年九十才

七月二十五日 小野奥

〈厨子正面墨書銘〉

小野

(六) 制作年代

江戸時代末期(一八六〇年代)

(七) 伝来

名張市西方寺の本堂内向かって左奥に祀られる。

(八) 備考

富森一九七六によれば、本像の台座には「文久三年七月 光政」の墨書銘があったという。しかし、現在それに該当する台座は残されて

いない。

泰山法印坐像

(一) 形状

頭部を円頂とする。両手は腹前で禪定印を結び、顔を正面に向けて、畳座上で結跏趺坐する。服制は、前あわせの法衣の上に袈裟を懸け、裙を着ける。袈裟は左肩下で吊る。

(二) 品質・構造

木造。寄木造。彩色仕上げ。玉眼嵌入。

頭部は、面部で仮面上に矧ぎ(または割り矧ぎ)、内矧りのうえ、玉眼を嵌入する。首柄を設けて襟元で体部に挿し込む。体幹部も木寄せ不明だが、左右に矧ぐかとみられ、内矧りを施す。体幹部は、両体側部を含んで正中及び肩上で前後左右に四材を矧ぐ。両袖先、脚部、裙先を別材矧ぎとし、両手首先を挿し込む。像底に底板を嵌め込み、白色に彩色する。

(三) 保存状態

右袖先と裙先を亡失する。体部と脚部の矧ぎ目が緩む。彩色の一部が剥落する。

(四) 法量(単位：センチメートル)

像	高	三三・五	面	巾	七・二	
頭頂く顎先	張	一〇・六	面	奥	一〇・三	
耳	張	八・八	袖張(現状)	厚	一五・〇	
肘	張	二四・四	膝	奥	二四・五	
胸	厚	一三・六	膝高(左)	七・四	膝高(右)	七・七
膝	張	二八・二	台座高	二一・八		
坐奥(現状)	二五・二					

(五) 銘記・納入品

(付属木札墨書銘)

当寺第二十一世泰山法印像 安本亀八作

(六) 制作年代

江戸時代末期(一八六〇年代)

(七) 伝来

名張市極楽寺の本堂内に祀られる。

二、考察

(一) 概要に関して

以上の概要に基づき、若干の考察を行うこととする。

諸像は、角田富之坐像を除き、像高は一尺前後の小ぶりな坐像である。他地域に残る亀八作の肖像彫刻も同程度の像が多く、この大きさが彼の手がける肖像彫刻の標準的な像高であったといえる。

構造面からみると、諸像は江戸時代の仏像に一般的に用いられているもので、亀八が仏師の家の出であったということを裏付ける。具体的には、頭部と体部と別材で造り、首柄を設けて体部に挿し込むこと、面部を短い(または割り短い)玉眼を嵌入すること、体部に内割りを実施すること、脚部に別材を短くこと、両手首先を別材で造って袖口から挿し込むことなどの方法は中世以来の仏像彫刻に通常の構造であるが、洋風を受けた近代彫刻では考えられない手法である。亀八は晩年の作例でもほぼ同じ構造を用いており、その技術的基礎はこの時期以前に確立されていたことが分かる。

表現面では、小像であるためか、やや頭部を大きく造るプロポーションである。これは肖像彫刻として、頭部、とりわけ顔を最も重視したことによるものと考えられる。諸像の顔立ちはそれぞれに個性があり、人間味豊かな趣を表現しているが、特別に生々しいとはいえない。

い。亀八は生前も、現在も生人形師としての知名度が高いが、熊本現代美術館所蔵の「相撲生人形」と比べると、諸像の表情は誇張が少なく、いわゆる生人形のイメージと比べると落ち着いている。生人形と肖像彫刻とで、表現を造り分けていたことが窺われる。

肖像彫刻としての肖似性については、像主の写真は残されていないものの、岡村甚六坐像は、現所蔵者の御尊父とはよく似ているとい、現所蔵者とも似たところがあると、筆者には感じられる。また、角田家に伝わる角田半兵衛の肖像画(裏に「富教絵図」と墨書される)は、亀八の筆とされ、角田半兵衛坐像下絵と伝わるが、両者の顔には明らかに類似性が認められる。これらのことから、恐らく、諸像は肖像彫刻として肖似性を有している作例と推定される。

(二) 制作年代について

制作年代については、一八六〇年代前半と推定される。富森氏は亀八がこの時期に名張に滞在したとして、その寄寓場所が横山文吉氏宅の裏長屋であり、万延元年(一八六〇)にはすでにここに寄寓していたことは確かと記している。名張滞任時期を裏付ける記録としては、奈良県山添村葛尾観音寺十一面観音立像の修理銘、三重県津市高山神社の絵馬、名張市柏原公民館の和州騒動実写絵図がある。観音寺像には、万延元年に名張在住の木平甚右衛門が「肥後熊本住人 仏師安本亀八光政」に修復させた旨の墨書銘があり(『波多野村史』)、高山神社絵馬には額に文久三年の年紀と名張の有力者十六人の名が墨書され、「安本光政」の刻銘が記されている。また、和州騒動実写絵図は、文久三年(一八六三)に起こった天誅組の争乱を描いたもので、元治元年(一八六四)三月に奉納された旨が記され、「光政」の印が残る。

また、現状では諸像に年紀が確認できないものの、小野三左衛門坐像の台座には「文久三年七月 光政」の墨書銘があったという。これを記す富盛一九七六は、資料の実見に基づく記録が多く、全体にその記述内容は信用できる。かつてその台座が存在したと考えられる。

これらの名張在住者が願主となり、一八六〇年代前半の年紀を伴う諸資料の存在からみて、富森氏による滞在期間の推定は大筋では誤りなからう。ただし、近隣地域には異なる記録や伝承も残されており、名張滞在期間についてはなお検討すべき点も残る。

以上のことから、諸像の制作年代は亀八が名張に滞在またはかかわった一八六〇年代前半と推定できよう。

おわりに

本稿では、三重県名張市に残る安本亀八の肖像彫刻七軀を紹介し、若干の考察を行った。諸像はいずれも中世以来の仏像彫刻に通有の構造をもち、亀八が仏師としての側面を持っていたことを裏付けている。その表現は、実人的ではあるものの、やや控えめで、生人形師としての作域とは趣を変えていることが窺われた。また、肖似性を有していることも推定できた。制作年代は、亀八が名張に滞在またはかかわった一八六〇年代前半と推定した。

亀八の肖像彫刻は、奈良県下にも十数軀が残されているほか、東京・永青文庫細川宏子坐像、大磯町歴史資料館松本順立像などが知られている。彼の肖像彫刻については、これらの作例と併せて総合的に考えるべきであるが、現時点における筆者の知見からすれば、この時期以降の亀八の肖像彫刻が大きな変貌を遂げるとは考えていない。一八六〇年代前半に造られた名張の諸像は、亀八の肖像彫刻における仕事ぶり、または彼の仏師的側面を考える上でも大きな存在といえる。

亀八の仕事には、本稿でも触れたように絵画作例も残され、名張市宇流富志禰神社には能面橋姫（「熊本住／安本光政」の刻銘がある）が、津市高山神社や京都北野天満宮にはレリーフを貼り付けた絵馬が、そのほか個人蔵の置物、風俗人形なども確認されるなど、大変幅広く、決して生人形細工人だけが彼のプロフィールではない。こうし

た仕事の中、作域などの多様な側面について、今後総合的に考察すべきであると考えている。今後順次に取り組む課題としたい。

最後に、日本の肖像彫刻史の上から、本稿で扱った諸像についても触れておく。名張の角田半兵衛、岡村甚六、横山文圭は当時の有力町人層に属し、彼らが競うように自分や先祖の肖像彫刻を造らせて自宅に置くという状況があったことが分かる。似た状況は奈良県下の複数の地区でも見出すことが出来る。像は宅内において祀られていることもあるが、自宅に自分や先祖の肖像彫刻を置くという状況は、中世から近世にかけて、日本の肖像彫刻が基本的に寺社に祀られて、礼拝対象とされてきたことを考えると、新しい現象といえる。肖像彫刻に対する意識の変化が窺われ、これも見逃せない現象と考えられる。この観点からも本稿の諸像は意義を有するといえよう。

参考文献

- 『波多野村史』（一九六二年五月 波多野村史編纂委員会）
 富森盛一『生人形師 安本亀八』（一九七六年、名張青年会議所）
 熊本市現代美術館『生人形と松本喜三郎』（二〇〇四年）
 瀧川和也『名張に多く作品残る―安本亀八の生人形』（『続・発見！三重の歴史』第八十三話、二〇〇八年、三重県史編さん班）

〔付記〕

本稿を為すに当たり、各ご所蔵の方々には調査、撮影にご高配を賜りました。とりわけ、角田勝氏ご夫妻には格別のご厚意を賜りました。記して深謝申し上げます。

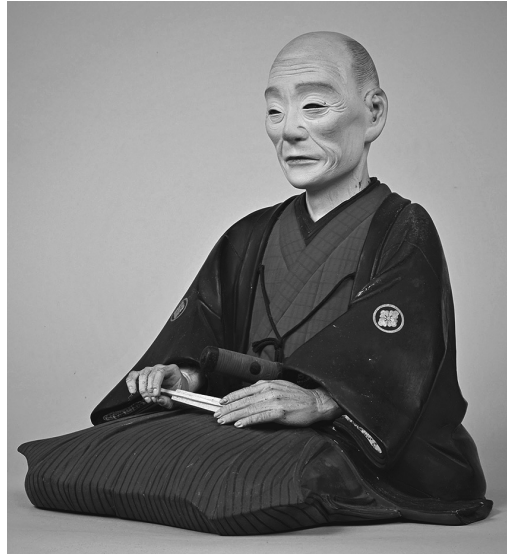
また、本稿に掲載した写真は、萩原哉氏の撮影によるものである。併せて御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費助成事業による基盤研究（C）「中世・近世の肖像彫刻に関する総合的研究」（課題番号18K00165）の成果の一部である。

角田半兵衛坐像



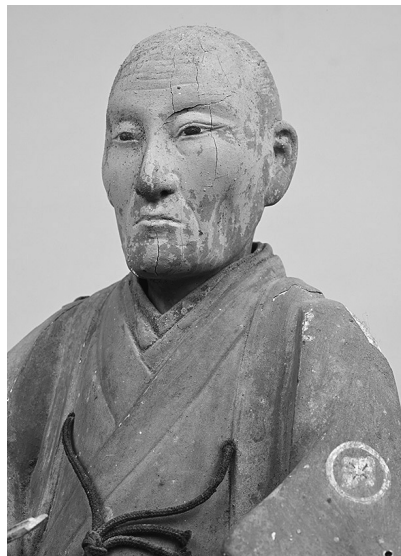
「富教絵図」(下絵か)



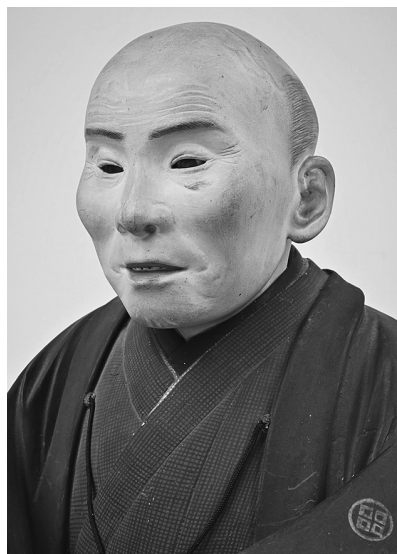
角田
みか
坐像



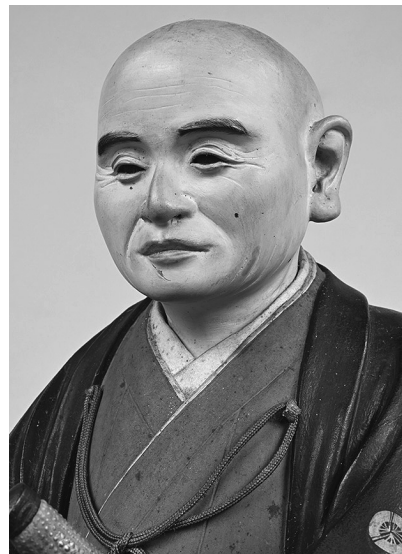
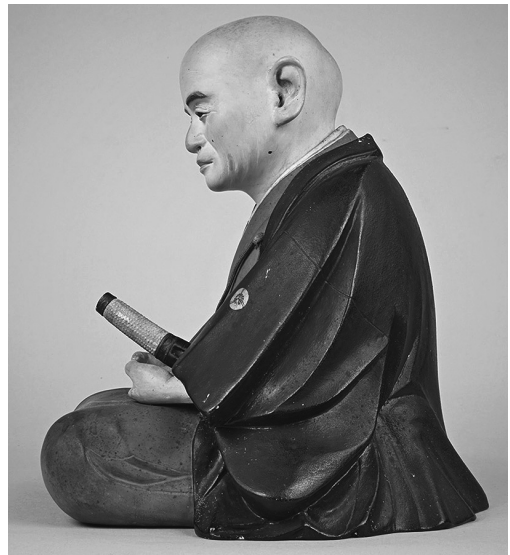
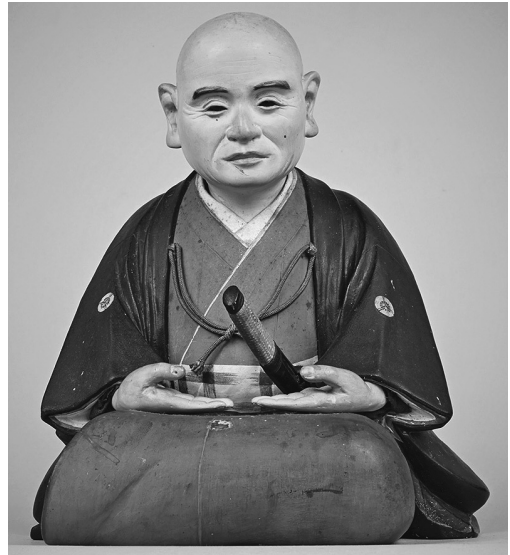
角田富之坐像



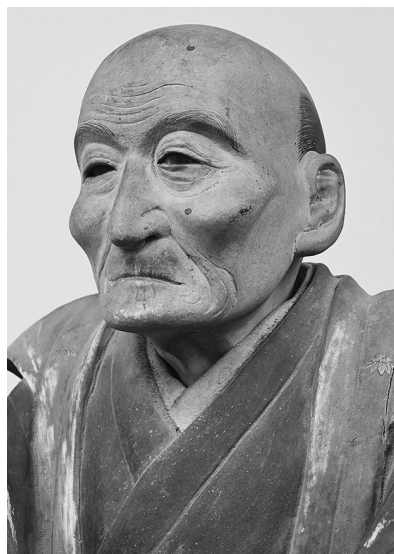
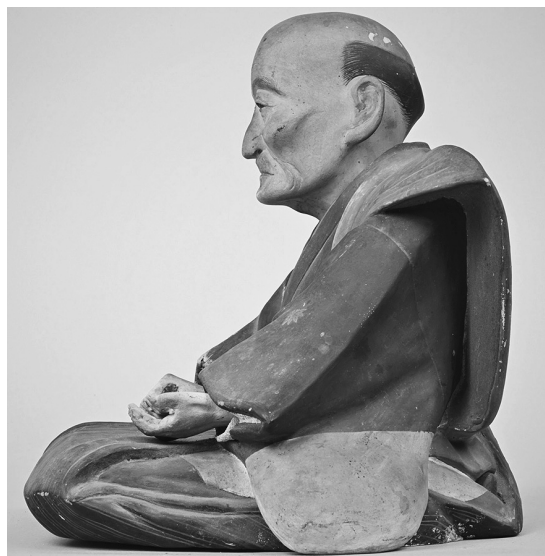
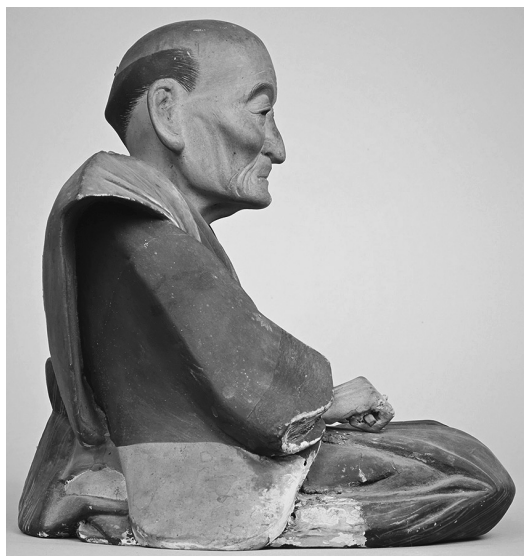
岡村甚六坐像



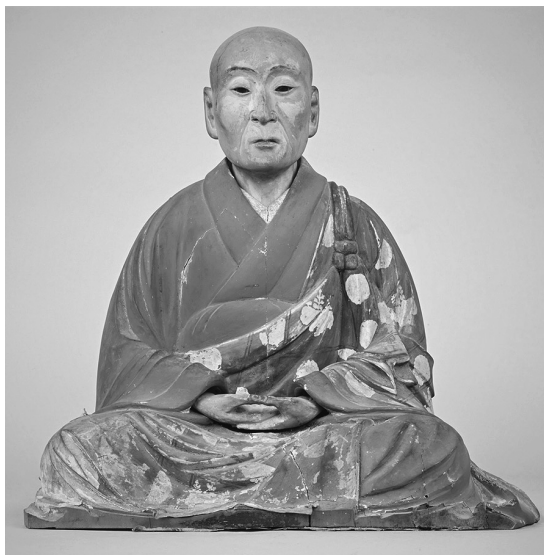
横山文圭坐像



小野三左衛門坐像



泰山法印坐像



當寺第二十五泰山法印像
案惠作

